

非情の街ニューヨーク

——ウォール街にて——

ニューヨークは仕事で何度も訪れたが、好きになれない。人々は、金と名声と権力を求めて、忙しそうに動き回る。

わたしがニューヨークを訪れる時は、なぜかいつもビジネスだけの旅になってしまう。国際訴訟、労働紛争、M&A、不動産買収……。多額の金が絡んだパワー・ゲームの真っ只中にわたしは放り込まれる。勝者は勝ち誇り、敗者は呻吟する。高層ビルが林立しようと、証券取引所が賑わおうと、わたしのニューヨークのイメージはモノトーンだ。

ドアを開けて日本人が入ってきた。一見して育ちのいいポンポンであることがわかる。ボタンダウンの真っ白いワイシャツにやや派手目のネクタイ。ライトベージュのブランドもののスーツを着こなし、お洒落のセンスもいい。

Hello Tony. Hello Bill, how are you?

アンソニー・シャトナー氏（アジア地区統括本部のトップ）と、ウィリアム・ウィットマン氏（社内弁護士）は「ハーイ」とそっけない返事を返す。

男は日本人のわたしを見て、「オヤ？」という顔をしながらも、ニコニコとして挨拶をする。

「初めまして、加藤です。よろしく……。」

「弁護士の矢部です。」わたしも名刺を渡す。今日のミーティングに何の疑念も持っていないらしい。

そこはニューヨークのロワー・タウン、ウォール街の高層ビルにあるY社の一室だった。部屋からはマンハッタンを一周する遊覧船が見える。暑い夏の日だったが、部屋の中はエアコンが効いて快適だった。部屋の隅には大きなフラワー・スタンドが置かれ、赤紫のアゼリアと大振りのユリの花が豪奢に飾られていた。マホガニーブラウンの調度で統一された部屋の雰囲気に、白いカサブランカが美しい。ユリの花言葉は純潔。清楚なユリの芳香が部屋を充たしていた。

——極秘調査——

ニューヨークでのミーティングの3週間ほど前、突然ニューヨークのY社から東京のわたしの事務所に連絡が入った。

日本の子会社（Yジャパン）から「内部告発文書」が届いた。加藤社長と会社幹部数名が業者からキックバックを貰っているらしい。については極秘に徹底的な調査をしてほしい……。

子会社にはもちろん顧問弁護士がいるのだが、ニューヨークの本社は顧問弁護士と加藤社長との親密な仲を嫌って、利害関係のない第三者のわたしに依頼してきたらしい。

例によってこの件は「Urgent & Confidential（至急/極秘）」だった。早速わたしは、公認会計士、弁護士、それに補助スタッフ合計5名の調査チームを作り、週末極秘裡に子会社の経理書類を洗った。

その結果、Yジャパンの取引先のうち2社が、実体のないペーパー・カンパニーである疑いが強まった。

これらの会社の登記簿謄本を取ったところ、2社とも加藤社長の兄弟が取締役に入っていることがわかった。しかも2社の住所は、同じマンションの同じ部屋にある。加藤社長のダミー会社であることは明らかだった。

経理書類によると、Yジャパンから2つのダミー会社に対し、コミッショナ名義で年間数千万円が支払われている。これらの資料でも加藤社長の背任行為は証明できるが、われわれはもっと明白な証拠が欲しかった。

われわれは信頼できる日本人部長2名に協力を求めた。もちろん調査の目的は明かさず、本社が数年毎に世界各地で行う緊急監査の一貫という名目だった。インタビューした部長の一人が、調査に極めて協力的だった。どうやらこの部長は内部告発文の主らしい。

この部長の協力を得てさらに調査を進めた後、われわれは決定的な証拠を入手した。社長室のパソコンに、疑惑の2社の経理書類が保存されていたのである。しかもそこにはYジャパンとダミー会社との取引だけではなく、ダミー会社から加藤社長と2人の兄弟に支払われた報酬の明細まで記載されていた！

事態がこうなった以上、加藤社長を解任する他はない。しかし、臨時株主総会や取締役会を開いていては、加藤社長に隠ぺい工作する時間を与えてしまう。部下と口裏を合わせ、帳

簿を改竄し、弁護士に相談するだろう。加藤社長は会社名義の約束手形や代表印も保管しているので、もめると面倒なことになる。

わたしは、ニューヨークの本社と解任の方法を話し合った。加藤社長はそれなりに部下の評判が良かったから、「部下から切り離し孤立した状況で辞任を迫るのがベスト」という結論になった。結局「長期計画打ち合わせ」を名目に加藤社長をニューヨーク本社に呼ぶことになり、万一に備え、急遽わたしも同席することになった。

——孤立無援の加藤社長——

そんな経過も知らずに、わたしと名刺交換をすると、加藤社長はゆったりと席についた。
今日は残念な話をしなければならない……。

シャトナー氏が直截に話始める。

取引先のS社とN社について不明瞭な噂がある……。

2社の名前を聞いた途端、加藤社長の顔がこわばった。シャトナー氏は一気に畳みかける。
この2社とおまえとの関係については、完全に調査がついている。おまえはYジャパンから2社にコミッショナ名義で金を支払い、後にこの2社からキックバックを貰っていたことは明らかだ……。

思いもかけない話に加藤社長も動転し、かすれ声で反論する。

そんなことはない。誰がそんなことをいったのか。これらの会社との取引は正常な商取引にすぎない。そんな話は根も葉もない噂話だ。

加藤社長は、青ざめた顔ながら結構切れのいい英語で反論する。

そんな噂を誰から聞いたのか。名前を教えて欲しい。わたしに反対する社員がいいかげんな噂を振り撒いているに違いない。これは謀略だ……。それに、この2社とのことは、本社の前会長も知っていることだ……。

社内弁護士のウィットマン氏が声高に吠える。

前会長は関係ない。われわれはお前の背任行為を問題にしているのだ。
ここに辞表を用意した。これにサインすれば穩便に処理しても良い。

サインしないなら解任する。

加藤社長はただ机を見続けるばかりだった。コップの水を飲む手が小刻みに震えていた。彼は必死に心の動揺と闘っていた。長い沈黙の後、彼はかすれた声を絞りだした。

返事は明日まで待ってほしい。相談したい人がいる。

シャトナー氏はにべもなかった。

No!

しかし、加藤社長も決してサインをしようとしなかった。

沈黙が続いた。3分、5分と時間は過ぎていった。エアコンのかすかな音さえ煩さかった。強すぎる白ユリの香りが皆を苛立たせた。

わたしは、分厚い書類のファイルを加藤社長に見せた。

加藤さん、ここに一切の証拠がある。Yジャパンとダミー会社との取引書類、ダミー会社の登記簿謄本、そして、ダミー会社の経理書類もある……。

無駄に争わない方がいいのではないですか。争われるとY社も強硬になり、刑事告訴など面倒な事になりますよ。

わたしは書類の中から刑事告訴状、損害賠償請求の訴状を取り出して見せた。加藤社長は、初めてわたしが同席した意味を知ったようだった。

わたしは日本語で話しかけた。

辞表と退職慰労金の放棄書、それに簡単な和解契約を準備しております。

ここで今サインをして下さい。ちょっとした出来心でやられたのかも知れないが、発覚した以上責任は取るべきでしょう。漢というものは自分の行為に責任をもつべきではないですか。明日までは待つことはできません。今ここでサインするかしないか。2つに1つです。

——溺れた犬は撃ち殺せ——

さらに数分の沈黙の後、加藤社長は、ガックリと肩を落とした。

わかりました。

彼にとっては辛い決断に違いない。

加藤社長がサインを終えるとシャトナー氏はいった。

これで全ては終わった。こちらのドアから帰ってもらおう。

シャトナー氏は、裏口に通ずるエレベーターへの道を指し示した。加藤氏はそれなりに業績を上げ、過去5年間に売上を倍増させた。しかし、その貢献に対する労いの言葉もない。力無く加藤氏は立ち上がった。彼は確か42才。まだ小学生の子供たち2人と妻を抱えて暮らしていくかなければならない。

さすがに哀れみを覚え、わたしは「まだ出直しが効く年代ですから、健闘を祈ります」と声を掛けようとした。しかし、思い留まった。そんな生温いセンチメンタリズムはここでは通用しない。「罪を憎み、人を憎む」のがアメリカ流である。憐憫の情をかけたら、わたしでも疑われる。

わたしは本件限りの助っ人稼業。事件が解決した以上、もう用もない。シャトナー氏とウィットマン氏と握手し、わたしも一人Y社を後にした。夕暮れのニューヨークの雑踏を歩きながら、わたしは事件のことを考えていた。

彼はなぜ経理をごまかすなどと、馬鹿げた事を考えたのだろうか。40代の男のアキレス腱は愛人かギャンブル。金の使い道はおよそ推測できるが、年俸3800万円を棒に振ってしまった……。

ビルの谷間にスモッグに濁った夕日が沈んでいく。わたしには、ただあの白いカサブランカの強い香りの記憶が残った。